

編集後記 (新しいうねり)

小川勇二郎 筑波フォーラム編集委員
生命環境科学研究科地球進化科学専攻教授
(おがわ ゆうじろう／構造地質学、海洋科学)

法人化後数年が経過したが、その成果や影響などがそろそろ出始める頃と思っていたが、今回の「フォーラム」を読んで、新しいうねりが個人をも大きく動かしつつあることを強く感じた。おそらく欧米先進国に倣いさらに日本独自の形で、大きな研究・教育改革が深く静かに進行しているのであろう。特集としての、「学内の眼」のすべての文に、この新しい取り組みの新しい方向性が見て取れるように思う。

私も、自分の担当の専攻以外の学生からも、この数年、全く新しい意識を感じ取っていた。我々の専攻では、地球や惑星の、また生物の進化を4次元的に捉えようとしているが、もちろん現在の環境の基礎も研究・教育している。学生へのテーマはそれらの基礎の基礎であるが、それと同時に、現代的なあるいは将来的なテーマをも加味している。以前に存在していた理工学研究科(修士課程)での講義には、他専攻の学生もが多数聴講していた。その学生たちのテーマが、数年前から、地球環境・地球保

護・資源エネルギー保護・それらの問題解決への効率化、などへ急激にシフトしたのを感じていた。今回、理工系・文科系の(そのようなものの区分や境界は本来ないものと思うのだが)教官・研究者、職員の方々の「プロジェクトと夢」、「私の授業」を読んで、それらがすでに根深く行われていて、将来の方向性がはっきりとしたものとなっていることが感じられた。特に、従来のあらゆるものの成長・発展・進化を目指すといった概念から、新しい取り組みへと変わっている。それは一言で言えば、「人間と自然と社会の三者の調和」と言えないだろうか? 研究・教育が将来を見据えたものであるべきなのは当然であるが、今まで見過ごされてきたことを人間の基本に立ち返って見直すことが、おそらく21世紀になったとたんには始まったのだと思う。それは今世紀初頭の大事件や、今般の温暖化問題などの現実性と無縁ではないだろう。今後とも、それはすべての大学人の思考に必須の方向性ではないか、と強く感じた。